打撃投手も練習のうち

久保田信一

私は中学(関西甲種商)で、明大で投手をしていた、鶴田さんのコーチを受けていた。そんな関係で長谷川さん、谷沢さんとも親しくなり、鶴田さんから、「明大を受けろ」とすすめられていたので、明大を受験することになり、長谷川さんに話したところ、長谷川さんが、梅田さんに頼んでくれた。そんなわけで梅田さんの推薦で、外野を守っていた森松と一緒に、明大へ入ることになった。昭和四年の春のことだ。森松も、私と同じようにレギュラー・ポジションをとれなかった。それでも下積み生活に耐えて、よく頑張っていたが、いま一歩で卒業というときに、やめてしまったのは惜しい。

明大に入っても、予科の二年間は、もっぱらバッティング投手にあけくれていた。一緒にバッティング投手に刈り出された仲間は、外野の河野、あとでキャプテンになった三塁手の三浦などだ。三浦などは最上生になって、キャプテンになっても、フリー・バッティングに投げていた。私も、学部に入ってからでも、投手が足りなくなると、バッティング投手を買って出たことがある。一日少なくとも二百球に投げる。それはつらいが、バッティング・ボールを投げることだって、立派に練習になる。そう思っていたから、少しも抵抗は感じなかった。

私が入ったころは、ショートに田部さんという大天才がいて、神宮の人気を一人でかっさらうほど、うまい選手だった。その後の真野さんもまた、守備のうまい、打たしても、走らしてもソツのない好選手。とても私の出る幕はなかったが、うまい先輩がいたからこそ、その人達から、いい技術を吸収できるというもで、いまでも明大を選んでよかったと信じている。

ゲームではピンチ守備に起用されることが多く、私もまたバッティングより守備に自信があった。大学では、十分腕をふるうチャンスもなかったが、大学時代に教えられ、鍛えられたことが実を結んで、社会人になってから、活躍することが出来た。当時としても野球選手にしては身体の小さい方だった私、よく「ついていくのが大変だったでしょう」といわれるが、中学時代からみっちり鍛えられたので、練習では誰れにも負けないスタミナがあった。

私が入学してから、グラウンドが駒沢から和泉に移った。駒沢は近所になにもないし、合宿は狭くて、外からまる見えといった、住みずらいところだったが、和泉は、当時としては、モダン建築だった。それに、二人部屋で設備も整い、学生には、すぎた合宿だった。和泉になってから、収容人員もふえて、当時は四十人ぐらい入っていたはずだ。